

公開講演1(PL1)

池間方言形態音韻論--名詞提題形, 対格形を中心に¹

田窪行則(国立国語研究所)

ytakubo@ninjal.ac.jp

1. はじめに

本発表では宮古島西原地区で話されている宮古語池間方言の形態音韻論について概説する。まず、簡単に音韻論の概説を行い、表記を導入する。この音韻論の部分は表記のために導入するもので、網羅的な解説ではない。以後の表記法は音韻論に基づいて導入した正書法によって行う。次に名詞提題形, 対格形を中心に名詞形態音韻論について概説する。必要に応じて、動詞形態音韻論に触れる。本発表の目的は池間方言の記述的な体系を示すことではなく、池間方言の形態音韻論に関して問題点を明らかにすることである。西原で話されている池間方言全般に関する概説は林(2009), Hayashi(2010, 2013)を見られたい。

2. 音韻論と表記

2.1. 音韻論

母音 池間方言の母音には以下のものが区別される。短母音は /a,i,u,i/ の 4 つがあり、長母音としては /a:,i:,u:,i:,o:,e:/ がある。/o:/, /e:/ は応答詞(o:, e:) , 終助詞(do:) にしか使われない²。/i/ は, /s, dz, c(=ts)/ の後にしか現れないが, /s/ の後に /i/, /u/ が現れるため最少対が作れる。

/siba/(心配) : /siba/(唇) : /suba/(そば) , /muusi/(燃やす) : /muusi/(燃やせ)

子音 子音は以下のものが区別される。/p,b,t,d,k,g,c(=ts) , dz,s,f,r,m,n,ŋ,n,j,w,h,j/

/hu/[ɸu:] と /fu/[fu:] は対立する。/hu:/(している) vs. /fuu/(来る)。

他の宮古語の方言は音節末に /m/ と /N/([n]~[ŋ]) の対立があるのに対し、池間方言の若い話者(70代以下)には対立がなく、/N/のみである。池間方言では鼻音は鼻音と結合して二重鼻音をなしたり、阻害音の前に来ることができるがその場合も、対立はない。

[dz] と [z] は対立がなく、自由異音であると思われる。また、/c/, /dz/ は /i/ 以外の母音の前では口蓋化する。したがって、{/c/, /dz/} +{/u/, /a/} と{/c/, /dz/} +{/ju/, /ja/} とは中和する。

/ci:/(乳) vs. /cju:/(露)

*[tsu], *[tsa] vs. [teu], [tea], 例 /cju:/ [teu:](露) , /acja/ [atea](明日)

¹ 本稿のデータは発表者の宮古島西原地区でのフィールドワークに基づく、主なコンサルタントは仲間博之氏(71歳)で、ほかにも何人かの話者(70~75才)に調査した。池間方言の実際の発音や談話資料に関しては発表者の作ったデジタル博物館サイト

(<http://kikigengo.jp/nishihara/doku.php?id=start>)を見られたい。また、本発表の一部は Takubo (2015), セリック・田窪 (2013), Celik and Takubo (2014) ですでに発表したものを含む。

² 借用語には /e/, /o/ の短母音も現れる。

他の子音に関しては/u/と/ju/, /a/と/ja/は対立する。例 /ku:/(苦しい) /kju:/(今日)
二重子音/zz/は口蓋化しない。例 /zzu/(魚)
/cc/は口蓋化する。例 [umatteu] (=umac+u) [ttsu]は存在しない。

/p/は非常に少数の単語と借用語に現れ、他の宮古方言の/p/はほとんどが/h/に対応する。

/pa:/(おばあさん), piiki(穴をあける)

音節 鼻音は音節末だけでなく、音節初頭にも現れるが、単独で現れる場合、同一調音位置の二重子音の場合は/m/, /n/の対立がある。調音点が異なる鼻音の組み合わせ(nm, nm) はない。阻害音の前では/m/, /n/の対立はない。[nta]~[mta]は自由変異であると思われる。音節の構成は以下のようになる。

A : (C1) (C2) (G) V1(V2) (C3)

これとは別に鼻音のみからなる音節が可能である。

B: /NN/(=/N:/) (芋), /N̥N/(汲む, 踏む)

特殊な分布を持つ子音

/N/ : j, w, h 以外の子音の前に現れる。/nta/(土), /nsu/, /n:ku/(膿), /ncci:/(汁)

/N̥/ : /N/, /n/, /m/の前には来ない。/N̥na/(綱), /N̥mu/(雲)

無声化のマークと考えることもできる

重子音 /j,w,h, N̥/以外のすべての子音が二重母音になることが可能である。/r/は二重子音になると/r/で発音される。

/t:, k:, c:, f:, s:, z:, r:, v:, m:, n:/

例 /t:a/(舌), /k:unuci/(9つ), /c:jui/(壊れる), /f:a/(子供), /mullu/(むろあじ)

/s:a/(foot), /z:a/(父親), /v:adi/(売ろう), /m:a/(母親), /n:a/(巻貝)

自由形態素(単語)は最低2モーラなければならない。1モーラからなる自由形態素はない。音節初頭の二重子音、複合子音があれば、母音が短母音でも2モーラをなすと考えなければならない。したがって、C1は1モーラをなすと考えなければならない。二重母音については後述する。

2.2. 表記法

- 以下形式の表記には//を省略し、以下の簡略した音素表記によって表記する。
- 長音記号は用いず、母音を二つ、子音を二つ書く。

- 無声鼻音は、無声化表示と解釈し、h+鼻音で表記する。hは1モーラの長さを持つ
例 hnu(雲)
- mと対立するnとn, mの中和した鼻母音Nとは分布により区別できるためnで表記する。例 mn(芋), nta(土), ssan(風)

3. 名詞の形態音韻論 主題と対格形を中心に

3.1. 主題形と対格形の分布

池間方言の主題形は以下のような分布をなす。

主題形

- aで終わる名詞の後 =a ffaa ffa(子ども) +a
- uで終わる名詞の後 =u zzuu zzu(魚) +u
- iで終わる名詞の後 =jaa sakjaa saki(酒) +a
- 二重母音、長母音で終わる名詞の後 =ja maija mai(米, ご飯) +a
- Ciで終わる名詞の後 CCa dussa dusi(友達)+a
- nで終わる名詞 nna inna in(海³, 犬)+a

対格形の分布もほぼ主題形と並行する。

対格形

- a、uで終わる名詞 =u ffa+u>ffau zzu+u>zzuu
- iで終わる名詞 =juu saki+u>sakyuu
- 二重母音、長母音で終わる名詞 =ju mai+u>maiju
- Ciで終わる名詞 =CCu dusi+u>dussu
- nで終わる名詞 nna in+a>inna

従来、他の宮古語の方言に関する記述(狩俣(1992)など)では提題形はja, 対格形はjuを基本的な形として、他の形式をそれらからの変化形とするのが普通であると思われる⁴。

従来の説明⁵

- a/uで終わる名詞:jを削除する。 ffa=ja>ffaa zzu=ju>zzuu
- iで終わる名詞:iを削除して母音を伸ばす。 saki=ja>sakjaa saki=ju>sakjuu
- 二重母音、長母音で終わる名詞:そのまま mai=ja mai=ju

³ 高齢者(80代後半以上)では他の宮古語の方言と同じくimの形で現れる。その場合は, immaとなる。

⁴ 上村(1992:802)ではwa>a>jaという変化を考えているようであるが「前舌形の母音と結びつくときのわたり音を取り込んで」(ia>jaという意味か)とあるのみで正確には分からない。

⁵ 例外はShimoji(2008)で伊良部島方言に対して、本稿と同じく、提題/a/, 対格/u/を基底の形式としている。Shimojiの観察と説明はほぼ池間方言にもなりたつ。本稿はこれと同じ立場で、説明を派生でなく、制約的に書きなおし、根拠の一部を加えたものとなっている。

- d. Ciで終わる名詞：iを削除し、順行同化する $dusi=ja>dussa$ $dusi=ju>dussu$
 e. nで終わる名詞：順行同化 $in=ja>inna$ $in=ju>innu$

この場合、uで終わる名詞に提題形をつけた形はそのままで説明できず、jを削除してから、uaをuuに変える規則を立てる必要がある。 $zzu=ja>zzua>zzuu$

しかし、通時的な変化として、日琉祖語の形を提題形*pa、対格形*woと考えると*pa>ja, *wo>juは多少問題がある。それぞれ*pa>wa>a, *wo>o>uのような変化を考えるべきであろう。となると、提題形はa、対格形はuとするのが自然となる。このやり方では次のような規則を考える必要がある。(a)はjaの場合より簡単であるが、そのかわり(d)はjを挿入する必要がある。(b, c)はjaの場合と同じであるので、その意味では記述力は変わらないが、(e, f)はjaとするより一見余計な操作が必要に見える。

aを基底形とする場合の説明

- a. aで終わる名詞の後 =a ffa ffa=a そのままつける
 b. uで終わる名詞の後 =u zzu zzu=a>zzuu uaをuuに変化
 c. iで終わる名詞の後 =jaa sakjaa saki=a>sakjaa
 d. 二重母音、長母音で終わる名詞の後 mai=ja maia>maija jを挿入
 e. Ciで終わる名詞の後 CCa dussa dusi=a>dussa
 f. nで終わる名詞の後 nを挿入 in=a>inna

以下では、提題形をa、対格形をuとし、非常に一般的な制約を仮定するだけで、簡潔な説明が可能であることを示す⁶。

以下のような規則・制約を考えると主題と対格の分布を同じように扱える(Celik and Takubo (2013)).

(A) 母音を三つ続けてはいけない： $*VVV>VVja$ ⁷

jは母音の3連続を避けるために挿入される。挿入子音はjとwの二つの可能性があるが、wはこの言語の制約に反するためjが挿入される。

(B)この言語ではiaとiuという母音連続は許されないため、iはグライドになる。ia>ja, iu>ju

(C)モーラの数と同じでないといけない。縮約をすれば代償延長をする.: Ci+a > Cj+a>Cja>Cjaa

(D)音節境界は保持しなければいけない：C+a>C+Ca

⁶ 以下の記述は Kenan Celik との共同研究の一部である。

⁷ この制約は最後の母音がiの場合成り立たない(下地理則個人談話：2018年7月30日)。faai (食べられる), dooi (doo+i)

具体的に見てみよう。まず、(A)により、長母音や二重母音終わりの名詞に提題 a, 対格 u が来た場合、この制約に引っかかる。このため形態素境界を守りながら(制約(D)), j が挿入される。

(A)*VVV

長母音で終わる名詞

suu(冬瓜)+a>suua jの挿入>suu=ja

suu+u>suuu jの挿入>suu=ju

二重母音で終わる名詞

mai(米) +a>maia>mai=ja

inau(竜巻)+a>inaua>inau=ja

mai+u>maiu>mai=ju

inau+u>inauu>inau=ju

(B)により、上昇二重母音はこの言語では許されない。したがってこの母音連続を避けるため、i をグライドにする⁸。i がグライドになるとモーラ数が変わるため、長母音化によってモーラ数を保持する(C)。

(B) *iu, *ia. (C)代償延長

banti(私達) +a>bantia>グライド化>bantja>代償延長>bantjaa

banti+u>bantiu>bantju>bantjuu

(D)の「音節境界の保持」であるが、これを適用するためにはいくつかの前提が必要となる。まず、Ciで終わる名詞におけるiは、自由形態はCで終わってはいけないとでもいう制約を仮定し、これらの語は単独で発音される場合にはiが挿入されていると考えねばならない。Shimoji(2008)ではこれらの語は最初から子音終わりの単語として記述されているが、池間方言では、明らかに母音が単語末に聞こえるためこのような仮定が必要である。そのように仮定すると、(D)の制約を守るため、同一調音点の子音が挿入される。

umac(i)(火) umac+a>*umaca>umac=ca

umac+u>*umacu>umac=cu

このように考えるとn終わりの単語も同様の現象と考えることができる⁹。

⁸ *uaもこの制約の一部とすることができるが、なぜwaにならないかが問題となるためここでは次節で別の制約を与える。

⁹ もし、in+jaとして順行同化するとするとn+j>nnという順行同化が仮定されなければならない

in (犬) in+a>*ina>in=na
 in+u>*inu>in=nu

林(2013)では、語末の i を基底から入っているものとし、子音終わりの単語を認めていない。彼女は母音連鎖 iV が許されないため i が脱落し、モーラ数を保持するため、C が重子音化すると考える。

dusi=a>dusa>dussa

この分析のメリットは次の動詞の活用形の交替を説明できることである。

終止形	否定形
sii (知る)	ssan
cii(釣る、着る)	ccan
cufii(作る)	cuffan

まず動詞の基本語幹を si-, ci-, cufi- とすると否定形-an との結合の結果を同じように記述することができる。終止形は通常 i をつけるが、ii が順行同化で ii となる。

この説明にはいくつかの問題がある。まず、-an は子音語幹の動詞に付く語尾で、母音語幹は-n が付く。

	終止形	否定形
子音語幹動詞	juman	jum (読む)+an
母音語幹動詞	miin	mii(見る)+n

また、母音語幹、子音語幹で形態が変わるものに使役形接辞(母音語幹動詞:-ssas/子音語幹動詞:-as)、受身形接辞(母音語幹動詞:-rai/子音語幹動詞:-ai)、尊敬形接辞(母音語幹動詞:-samai/子音語幹動詞:-amai)があるが、上記の動詞はすべて子音語幹としてふるまう¹⁰。

終止形	使役形	受身形	尊敬形
sii (知る)	ss-as	ss-ai	ss-amai
cii (釣る、着る)	cc-as	cc-ai	cc-amai
cufii (作る)	cuff-as	cuff-ai	cuff-amai

ないが、池間方言にはそのような例はほかにはない。

¹⁰ ほとんどの動詞が母音語幹の形式も持つため、ssi-samai, cii-samai, cuffi-samai の形も可能である。

もし、 $i=a>a$ という規則を仮定すると、これらの接辞が付く前に i を削除しないといけないが、その場合、削除のための環境が生じる前にこの規則をかけないといけなくなる。ここでは、これらの動詞の語幹を子音終りとすべきである。その際、重子音化は、音節境界の保持というより、形態素境界の保持のために考えるべきかもしれない¹¹。

s(知る), c(着る), cuf(作る)

3.2 ua>uu の交替と動詞形態論

最後に $ua>uu$ の交替を考える。本発表では先に述べたようにこれを順行同化として見ている。この交替は上昇二重母音に対する制約でも記述できるが、その場合、なぜ $ua>wa$ のようなグライド化がおきないのかを説明する必要がある。動詞の否定接辞が付いた場合でも同様の制約があると考えられる。

池間方言の動詞には語幹が u で終わるものがある。このうち fau , kau は子音語幹動詞のようにふるまう。

fau (食べる)	$faan$	$fa-ai-$	$faa-s-$
kau (買う)	$kaan$	$ka-ai-$	$kaa-s-$

これらの動詞は、日本語共通語のように faw , kaw のような基底形を考えることもできるが、日本語共通語で $kaw-anai$ のように w が異形態として現れるのに対し池間方言では w は異形態としても現れない。 w を立てたとしても必ず削除しなければならないわけである¹²。

これに対して fuu , $umuu$ は母音語幹動詞のようにふるまう。

fuu (来る)	$kuu-n$ ¹³	$kuu-rai-$	$kuu-ssas-$
$umuu$ (思う)	$umuu-n$	$umuu-rai$	$umuu-ssas-$

さて、 $umuu$ の受身形の否定は $umuu-rai-n$ のほかに $umuuin$ という形もある。この形式は子音語幹に由来すると考えられる。つまり次のような規則変化を考えることができる¹⁴。

¹¹ 語幹を二重子音とすることも可能である。その場合は $*CCi$ のような制約があると考えて、 Cii の形を出す必要があるだろう。これはセリック・田窪 (2013), Takubo (2015) で示した考えで、Shimoji (2017), 下地 (2018) が伊良部島方言の同様の現象の記述に採用している。

¹² そのため Shimoji (2008) は、伊良部島方言に関する記述で、子音語幹、母音語幹といわず、クラス 1, クラス 2 という名称を採用している。

¹³ 池間方言 (及び他の宮古方言) では ku は fu に変化しているため $fu-u$ が終止形になる。 $kuu-n$ 「こ-ん」に対応する。

¹⁴ この観察は Kenan Celik による。

umu(w)-ai-n>umu-ai-n>umu-ui-n

同様の派生がこの動詞の使役形でも観察される。

umu-as>umuus-

つまり、umu は子音語幹動詞と同じ振る舞いもするわけである。したがって、ua>uu という規則を動詞においても想定する必要がある、名詞においても同様の規則が想定される。

4. 結論

以上提題形と対格形を中心に宮古語池間方言の形態音韻論を見てきた。提題の形式を=ja でなく=a, 対格の形式を=ju でなく=u とすることで非常に一般的な制約から実際の形式が導き出されることを見た。

参考文献

- セリック・ケナン, 田窪行則 (2013) 「適性理論による池間方言の形態音韻論」筑紫日本語研究会 2013 年 11 月 2 日. 九州大学
- Celik, Kenan, Yukinori Takubo (2014) Ikema topic and accusative marker, an OT analysis, FAJL poster sessions, NINJAL.
- 林由華 (2009) 「琉球語宮古池間方言の談話資料」大西正幸・稲垣和也 (編) 『地球研言語記述論集 1』, 153 - 199. 言語記述研究会
- Hayashi, Yuka (2010) Ikema. : Michinori Shimoji and Thomas Pellard (eds.)
An Introduction to Ryukyuan Languages, Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, pp.167 - 188.
- 林由華 (2013) 「南琉球宮古池間方言の文法」京都大学博士論文
- 狩俣繁久(1992) 「琉球列島の言語(宮古方言)」『言語学大辞典第 4 卷(下-2)』848-863. 三省堂
- Shimoji, Michinori (2008) A Grammar of Irabu, A Southern Ryukyuan Language. Ph. D. thesis. Australian National University.
- Shimoji, Michinori (2017) A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language. Fukuoka: Kyushu University Press.
- 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』東京外国語大学アジア・アフリカ研究所
- Takubo, Yukinori (2015) Issues in the verbal morphophonemics of Ikema Ryukyuan. Paper presented at Oninron Forum 2015.
- 上村幸雄 (1992) 「琉球列島の言語(総説)」『言語学大辞典第 4 卷(下-2)』771-814. 三省堂